

■ 疑問形 (反語形と形式は同じであるから、どちらであるかは文脈で判断する。)

疑問の助字	疑問詞	複合語(疑問詞+他の語)	その他
<p>— 乎(か) — 邪(か) — 耶(か) — 哉(か) — 也(か) — 与(か) — 歟(か) (…か)</p>	<p>誰(たれ) — 孰(たれ) (だれか…か) 孰(たれ) — 奚(いづれ) (どれどこが…か) 何(なに) — (何を…か) 何(なん) — 胡(なん) — 奚(なん) — 曷(なん) — 寧(なん) — (どうして…か) 安(いづ) — 焉(いづ) — 惡(いづ) — 烏(いづ) — 寧(いづ) — (どうして…か)</p>	<p>何(なん) — 為(なん) — 胡(なん) — 奚(なん) — (どうして…か) 何(なん) — 以(なん) — (どのように…か) 何(なん) — 由(なん) — (どうして…か) 如何(いかに) — (どのようにすれば…か) 如何(いかに) — 若何(いかに) — 奈何(いかに) (…をどうしようか) 何如(いかに) — 何若(いかに) — 何奈(いかに) (…はどうか) 幾何(いかに) — 幾許(いかに) (…はどれくらいか)</p>	<p>蓋(なん) — (…どうして…ないのか) 未(な) — (…かどうか) 否(いな) — (…かどうか)</p>
<p>君子(くんし) 亦有(も) 窮(きう) 乎(か) (君子も亦 窮すること有るか) 丞相(じやう) 誤(あや) 邪(か) (丞相 誤れるか)</p>	<p>誰(たれ) 加(か) 衣(い) 者(者) (誰か衣を加ふる者ぞ) 王(わ) 以(も) 為(な) 孰(たれ) 勝(か) (王 以つて孰れか勝つと為す) 於(こ) 斯(こ) 三(三) 者(者) 何(なに) 先(先) (斯の三者に於いて何をか先にせん) 何(なん) 及(及) 於(於) 我(われ) (何ぞ我に及ばんや) 子(こ) 奚(なん) 不(な) 為(な) 政(せい) (子 奚ぞ政を為さざる) 君(きみ) 安(いづ) 与(と) 項(こう) 伯(はく) 有(有) 故(こ) (君 安くんぞ項伯と故有る)</p>	<p>何(なん) 為(な) 斬(きる) 壯(さう) 士(し) (何為れぞ壯士を斬る) 奚(なん) 為(な) 餐(さん) 之(これ) (奚為れぞ之に餐らはしむる) 何(なん) 以(も) 利(り) 吾(わ) 國(こく) (何を以つてか吾が國を利する) 何(なん) 由(ゆ) 知(し) 我(われ) 在(在) 此(こ) 也(や) (何に由りてか我の此に在るを知るや) 如何(いかに) 則(すなは) 可(かな) 否(いな) (如何にすれば則ち可なるか) 為(な) 之(これ) 奈(な) 何(なん) (之を為すこと奈何せん) 今日(こんにち) 之(こと) 事(こと) 何(なん) 如(いかに) (今日の事は何如か) 相(あひ) 去(ま) 復(ま) 幾(いかに) 何(なん) (相去ること復た幾何ぞ)</p>	<p>蓋(なん) 反(かへ) 其(その) 本(もと) 矣(や) (蓋そ其の本に反らざる) 寒(かん) 梅(ばい) 著(は) 花(はな) 未(な) だ(だ) じ(じ) や(や) (寒梅花を著けしや未だしや) 觀(かん) 諸(しよ) 侯(こう) 集(あつ) 否(いな) (諸侯の集まるや否やを観る)</p>
<p>君子(くんし) 亦(も) 困(こ) 窮(きう) 事(こと) 有(有) る(る) の(の) だ(だ) け(け) が(が) 着(ち) 物(ぶつ) を(を) (私(わたし) に) 加(か) け(け) た(た) の(の) か(か) 王(わ) は(は) 誰(たれ) が(が) 勝(か) つ(つ) と(と) 思(おも) わ(わ) れ(れ) ま(ま) す(す) か(か) この(この) 三(さん) つ(つ) の(の) 中(ちゆう) の(の) 一(いつ) つ(つ) 何(なに) を(を) 先(ま) に(に) し(し) ま(ま) す(す) か(か) どう(どう) し(し) て(て) 私(わたし) に(に) 及(およ) ぶ(ぶ) う(う) か(か) あ(あ) な(な) た(た) は(は) どう(どう) し(し) て(て) 政(せい) 治(ち) を(を) し(し) な(な) い(い) の(の) か(か) あ(あ) な(な) た(た) は(は) どう(どう) し(し) て(て) 項(こう) 伯(はく) と(と) 面(めん) 識(し) が(が) ある(ある) の(の) か(か)</p>	<p>どう(どう) し(し) て(て) 勇(ゆう) 士(し) を(を) 斬(きる) の(の) か(か) どう(どう) し(し) て(て) 民(たみ) に(に) 食(く) べ(べ) さ(さ) せ(せ) る(る) の(の) か(か) どう(どう) よ(よ) う(う) に(に) し(し) て(て) わ(わ) が(が) 國(こく) を(を) 富(と) ま(ま) せ(せ) る(る) の(の) か(か) どう(どう) し(し) て(て) 私(わたし) が(が) こ(こ) こ(こ) に(に) 在(在) る(る) 事(こと) が(が) わ(わ) か(か) っ(っ) た(た) の(の) か(か) どう(どう) よ(よ) う(う) に(に) す(す) れ(れ) ば(ば) よ(よ) ろ(ろ) し(し) い(い) の(の) か(か) これ(これ) を(を) どう(どう) し(し) よ(よ) う(う) か(か) 今日(こんにち) の(の) 事(こと) 態(たい) は(は) どう(どう) う(う) か(か) 互(たが) い(い) の(の) 距(きょ) 離(り) は(は) い(い) つ(つ) た(た) い(い) だ(だ) れ(れ) くら(くら) い(い) か(か)</p>	<p>どう(どう) し(し) て(て) その(その) 根(こん) 本(ぽん) に(に) 返(かへ) ら(ら) ない(ない) の(の) か(か) 寒(かん) 梅(ばい) は(は) 花(はな) を(を) つ(つ) け(け) て(て) い(い) た(た) か(か) どう(どう) う(う) か(か) 諸(しよ) 侯(こう) が(が) 集(あつ) ま(ま) る(る) か(か) どう(どう) う(う) か(か) を(を) 觀(かん) 察(さつ) し(し) た(た)</p>	<p>● 句末に疑問の助字を用いて「…か？」の意を表す。終止形に接続するときは「や」、連体形に接続するときは「か」と読むのが普通。 ● 訓読する場合は、「係り結び」のきまりに従って、句末を連体形で結ぶ。 ● 句末に疑問の助字(乎・哉・也)を伴う場合が多い。 ● 「何・安・焉・惡」などは、「いづくニ」と読んで、「どこへ」の意になることもある。 ● 牛(うし) 何(なん) 之(これ) (牛は何くに之くや)</p>
<p>● 句末に疑問の助字を用いて「…か？」の意を表す。終止形に接続するときは「や」、連体形に接続するときは「か」と読むのが普通。</p>	<p>● 句末に疑問の助字(乎・哉・也)を伴う場合が多い。 ● 「何・安・焉・惡」などは、「いづくニ」と読んで、「どこへ」の意になることもある。 ● 牛(うし) 何(なん) 之(これ) (牛は何くに之くや)</p>	<p>● ほかに「若何」「奈何」がある。 ● 「如何」「若何」「奈何」は、どのように対処、処置するかを問う。(目的語は二字の間に入る) ● 「何如」「何若」「何奈」は、状態・程度・是非などを問う。</p>	<p>● 「蓋」は「何不」の合字で、「何不」と同じ。 ● 「著花末」は「著花+未著花」の略で、肯定と否定を重ねた疑問形の略。 ● 「否」のほかに「不」も用いる。 ● 尚在(な) 不(な) (尚ほ在りや不や)</p>

三 反語形 (言おうとする内容と反対のことを疑問形で表す、強調表現。)

その他	特別な語	複合語(疑問詞+他の語)	疑問詞	疑問の助字
<p>不亦(ズヤ) — (どうして…ないことがあろうか、いや、…する)</p>	<p>敢不(アヘテレ) — (どうして…ないことがあろうか、いや、…ない)</p> <p>敢(アヘテ) — (どうして…ようか、いや、…ない)</p>	<p>如何(イカニク) — (どうして…ようか、いや、…ない)</p> <p>何必(ニクニク) — (どうして…する必要があるのか、いや、必要ない)</p> <p>何為(ナニシテ) — (どうして…ようか、いや、…ない)</p> <p>何以(ナニニツキ) — (どうして…ようか、いや、…ない)</p>	<p>孰(レカダ) — 奚(シ) (だれが…ようか、いや、…ない)</p> <p>何(ナニニツキ) — (何を…ようか、いや、…ない)</p> <p>何(ナニニツキ) — (何を…ようか、いや、…ない)</p> <p>安(イカン) — 焉(ニ) (どうして…ようか、いや、…ない)</p> <p>安(イカン) — 焉(ニ) (どうして…ようか、いや、…ない)</p>	<p>誰(タレカ) — 孰(レ) (だれが…ようか、いや、…ない)</p> <p>一乎(イツ) — 邪(ヤ) (…)</p> <p>一耶(イツ) — 耶(ヤ) (…)</p> <p>一哉(イツ) — 哉(ヤ) (…)</p> <p>一也(イツ) — 与(ヨ) (…)</p> <p>一歟(イツ) — 歟(ヤ) (…)</p> <p>(…ようか、いや、…ない)</p>
<p>求(ムル) 劍(ケン) 若(ニシテ) 此(コノトキ) 不亦(ズヤ) 惑(ヒナラフ) 乎(カ) (剣を求むること、此のときは、亦惑ひならずや。)</p>	<p>臣(シ) 敢(アヘテ) 不(レ) 聽(カ) 命(メイ) 乎(カ) (臣、敢へて命を聴かざらんや。)</p> <p>籍(キョク) 獨(リ) 不(レ) 愧(ゼ) 於(ニ) 心(ニ) 乎(カ) (籍、独り心に愧ぢざらんや。)</p> <p>役夫(エキフ) 敢(アヘテ) 伸(ヘ) 恨(ミ) (役夫、敢へて恨みを伸べんや。)</p>	<p>豈(ニ) 水(スイ) 之(ノ) 性(セイ) 哉(ヤ) (豈に水の性ならんや。)</p> <p>如何(イカニク) 不(レ) 淚(ナ) 垂(レ) (如何ぞ涙の垂れざらんや。)</p> <p>王(ワウ) 何(ナニ) 必(ズ) 日(ニ) 利(リ) (王、何ぞ必ずしも利を日はんや。)</p> <p>如何(イカニク) 不(レ) 淚(ナ) 垂(レ) (如何ぞ涙の垂れざらんや。)</p>	<p>孰(レ) 甚(シ) 焉(ヨリ) (孰れか焉より甚だしからんや。)</p> <p>何(ナニ) 憂(ウ) (何をか憂へんや。)</p> <p>何(ナニ) 富(フ) 貴(キ) 也(ヤ) (何ぞ富貴とならんや。)</p> <p>焉(ニ) 用(ヨウ) 牛(ウシ) 刀(トウ) (焉くんぞ牛刀を用ゐんや。)</p> <p>何(ナニ) 為(シ) 寸(スン) 步(ブ) 出(デ) 門(カ) 行(ク) (何れぞ寸歩も門を出でて行かんや。)</p> <p>何(ナニ) 以(テ) 異(ヒ) 於(ニ) 人(ニ) 哉(ヤ) (何を以つて人に異ならんや。)</p> <p>王(ワウ) 何(ナニ) 必(ズ) 日(ニ) 利(リ) (王、何ぞ必ずしも利を日はんや。)</p>	<p>越(ハ) 其(レ) 可(ク) 逆(ラフ) 天(テン) 乎(カ) (越は其れ天に逆らふべけんや。)</p> <p>不(レ) 仁(ニ) 者(ヤ) 可(ク) 与(ヨ) 言(フ) 哉(ヤ) (不仁者は与に言ふべけんや。)</p> <p>誰(カ) 知(ラ) 烏(ウ) 之(ノ) 雌(メ) 雄(オ) 乎(カ) (誰か烏の雌雄を知らんや。)</p> <p>孰(レ) 甚(シ) 焉(ヨリ) (孰れか焉より甚だしからんや。)</p> <p>何(ナニ) 憂(ウ) (何をか憂へんや。)</p> <p>何(ナニ) 富(フ) 貴(キ) 也(ヤ) (何ぞ富貴とならんや。)</p> <p>焉(ニ) 用(ヨウ) 牛(ウシ) 刀(トウ) (焉くんぞ牛刀を用ゐんや。)</p> <p>何(ナニ) 為(シ) 寸(スン) 步(ブ) 出(デ) 門(カ) 行(ク) (何れぞ寸歩も門を出でて行かんや。)</p> <p>何(ナニ) 以(テ) 異(ヒ) 於(ニ) 人(ニ) 哉(ヤ) (何を以つて人に異ならんや。)</p> <p>王(ワウ) 何(ナニ) 必(ズ) 日(ニ) 利(リ) (王、何ぞ必ずしも利を日はんや。)</p>
<p>私はどうして命令を聞かないことがあろうか、いや、聞きます。</p> <p>どうして間違いないことがあるうか、いや、間違いである。</p>	<p>どうして水の本性であるうか、いや、水の本性ではない。</p> <p>どうして籍は心に恥じないことがあるうか、いや、そんなことはない。</p> <p>徴発されて労働する者がどうして恨みを言えようか、いや、言えない。</p> <p>私はどうして命令を聞かないことがあろうか、いや、聞きます。</p>	<p>どうして一歩でも門を出て行くうか、いや、行かない。</p> <p>どうして人と異なることがあるうか、いや、ありはしない。</p> <p>王はどうして利を言う必要があるうか、いや、必要ない。</p> <p>どうして涙が流れないことがあるうか、いや、流れないことはない。</p>	<p>だれが鳥の雌と雄の区別ができようか、いや、できはしない。</p> <p>だれがこれよりもひどいものであるうか、いや、どれもない。</p> <p>何を心配しようか、いや、何もない。</p> <p>どうして富貴の身分になれようか、いや、なれはしない。</p> <p>どうして牛切り包丁を用いようか、いや、用いない。</p>	<p>越は天に逆らうことができようか、いや、できない。</p> <p>不仁者とは一緒に話し合えようか、いや、話し合えない。</p>
<p>●「不亦」は、「なんと…ではないか」という感嘆の意にもなる。</p>	<p>●反語を示す副詞「豈・独・敢」を用いて反語の意を表したもので、句末に疑問の助字(哉・乎)を伴うことが多い。</p>	<p>●「必」は「かならずシモ」と読み、部分否定「不・必」の場合と同じ。</p>	<p>●句末に疑問の助字がなくても、「…ンヤ」と結ばなくてはならない。</p> <p>●「安・焉・悪・烏・寧」は、「いづくニカ…」と読むこともある。</p>	<p>●句末に疑問の助字を用いるのは疑問と同じだが、読みは「…ンヤ」となる。訳すときは、「いや、…ない」のところまではつきりと表現するのがよい。</p>

四

使役形

(他の者に、あること、ある動作をさせる意を表す。)

文意から	使役を暗示する動詞を伴う	使役の助字
	<p>□_{シテ} [A]_ニ (A)に□して…させる</p> <p>* □が動詞。</p>	<p>使_{シム} [A]_{ヲシテ} 遣_{シム} [A]_{ヲシテ} 令_{シム} [A]_{ヲシテ} 教_{シム} [A]_{ヲシテ}</p> <p> 遣_{シム} [A]_{ヲシテ} (A)に…させる</p>
<p>予助_{ケテ} 苗_ヲ 長_{ゼシム} 矣。(予_{われ} 苗_{なへ}を助_{たす}けて長_{ちやう}ぜしむ。)</p>	<p>命_{シテ} 将_ヲ 守_ル 関_ヲ。(将_{しやう}に命_{めい}じて関_{くわん}を守_{まも}らしむ。)</p> <p>説_{キテ} 夫_ニ 差_ヲ 赦_{サシム} 越_ヲ。(夫_ふ差_さに説_ときて越_{えつ}を赦_{ゆる}さしむ。)</p>	<p>天_{てん} 帝_{てい} 使_{シム} 我_ヲ 長_{カウ} 百_ニ 獸_ニ。(天_{てん} 帝_{てい} 我_{われ}をして百_{ひゃく} 獸_{じゆう}に長_{ちやう}たらしむ。)</p> <p>令_ム 騎_ヲ 皆_ヲ 下_{リテ} 馬_ヲ 歩_セ 行_{ハカウ}。(騎_きをして皆_{みな} 馬_ばを下_おりて歩_ほ行_{かう}せしむ。)</p>
<p>私は苗を助けて伸ばしてやった。</p>	<p>将に命じて関所を守らせた。 夫差を説得して越を許させた。</p>	<p>天帝は私にすべての獣のかしらとさせた。 騎兵にみな馬から下りて歩かせた。</p>
<p>● 口語訳をしてみたら判断する。</p>	<p>● 使役を暗示する動詞には、「命・説」のほか「挙・召・招・勸・遣」などがある。</p>	<p>● 主語―使―A―補語の形をとるが、Aや主語が省略される場合もある。</p>

五 受身形 (他から動作をはたらきかけられる意を表す。)

文意から	受身になる動詞	為一所	前置詞	受身の助字
	<p>ル(ラ)レ レ A (A)に…れる(へられる)</p>	<p>為^ナ A 所^ト (A)に…れる(へられる)</p>	<p>於^ニ A 于^ニ A 乎^ニ A (A)に…れる(へられる)</p>	<p>見^ルレ 被^ルレ 為^ルレ (…れる(へられる))</p>
	<p>飛鳥^{ヒヤウ} 尽^{キツ} 良弓^{リョウキウ} 蔵^{ザウ}。(飛鳥^{ヒヤウ} 尽^{キツ} きて、良弓^{リョウキウ} 蔵^{ザウ} せらる。)</p>	<p>以^レ 功^{コウ} 封^{セウ} 定遠^{テイエン} 侯^{コウ}。(功^{コウ} を以^レ つて定遠^{テイエン} 侯^{コウ} に封^{セウ} せらる。)</p>	<p>不^レ 獲^ラ 乎^ニ 上^ニ。(上^{ウヘ} に獲^ラ れず。)</p>	<p>信^ニ 而^{シテ} 見^レ 疑^ハ、忠^ニ 而^{シテ} 被^レ 謗^ラ。(信^ニ にして疑^ハ 是^レ、忠^ニ にして謗^ラ 是^レ。)</p> <p>父^ニ 兄^ハ 為^レ 戮^セ 於^ニ 楚^ニ。(父^ニ 兄^ハ は楚^ニ に戮^セ せらる。)</p>
	<p>飛鳥^{ヒヤウ} がいなくなれば、良い弓はおさめられる。</p>	<p>功績^{コウキツ} によつて定遠^{テイエン} 侯^{コウ} に封^{セウ} せられた。</p>	<p>楚^ニ の将軍^{シヤウジュン} に辱^ハ められた。</p>	<p>誠実^{テイジツ} でありながら疑^ハ われ、真心^{シンシン} を尽くしながら謗^ラ られた。 父^ニ と兄^ハ は楚^ニ で殺^ス された。</p>
	<p>● 口語訳をしてみても判断する。</p> <p>● ほかに「命^{メイ}・任^{ニン}・譎^{コト}・叙^{コト}・拜^イ・補^ホ・流^{リウ}」などがあり、いずれも上の者に「…される」意を表す。</p>	<p>● 「所」が省略されることもある。</p> <p>● 身^ハ 為^ル 宋^{ソウ} 国^{コク} 笑^{セウ}。(身^ハ は宋^{ソウ} 国^{コク} の笑^{セウ} ひと為^ル る。)</p>	<p>● 「於・于・乎」は受身の対象を示し、結果的に受身の意味を表す。英語の受動文における「by」に近い。</p>	<p>● 「る」は四段・ナ変・ラ変の未然形に、「らる」はその他の動詞の未然形に接続する。</p>

六 仮定形 (ある条件を仮に想定して、「もしそうであれば」、また「もしそうであつても」と、結論を述べる。)

文意から	その他	接続詞	仮定の副詞
<p>自^{よリハ}非^{あらザレバ}… (…でないかぎりは)</p>	<p>非^{アラザレバ}… 不^ズ… (…でなければ…ない)</p> <p>不^ズ… 不^ズ… (…なければ…ない)</p> <p>使^{シメバ}… (…[A]に…させたならば)</p> <p>微^{ナカリセバ}… (…がなかったならば)</p>	<p>今^{イマ}… (もしいま…ならば)</p> <p>則^{スナハチ}(即)^チ… (…ればそのときは…)</p>	<p>若^シ… 如^シ… 仮^ニ… (もし…なら…)</p> <p>苟^{イハシクモ}… (仮に…としても)</p> <p>縦^{タトヒ}… 縦令^{タトヒ}… 仮令^{タトヒ}… (たとえ…としても)</p>
<p>朝^ニ聞^カ道^ヲ夕^ニ死^ス可^シ也[。] (朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。)</p>	<p>人^ニ不^レ学^バ、不^レ知^ラ道^ヲ。 (人、学ばずんば、道を知らず。)</p> <p>自^リ非^シ聖^人、所^レ難^キ免^レ也[。] (聖人に非ざるよりは、免れ難き所なり。)</p>	<p>先^シ即^チ制^ス人^ヲ、後^ニ則^チ為^ス人^ノ所^レ制^ス。 (先ずれば即ち人を制し、後るれば即ち人の制する所となる。)</p> <p>今^レ不^レ急^ギ下^ラ、吾^ハ烹^シ太^公。 (今急ぎ下らざれば、吾は太公を烹ん。)</p> <p>雖^モ晋^ヲ伐^ツ、楚^ハ必^ズ救^レ之^ヲ。 (晋、斉を伐つと雖も、楚は必ず之を救はん。)</p>	<p>若^シ嗣^子可^ク輔^ケ之^ヲ。 (若し嗣子輔くべくんば、之を輔けよ。)</p> <p>苟^シ富^貴、無^ク相^忘。 (苟しくも富貴となるとも、相忘ること無からん。)</p> <p>縦^ヒ江^東父^兄、憐^レ王^ヲ。 (縦ひ江東の父兄、憐れみて我を王とすとす。)</p>
<p>朝^に人^{として}の道^を悟^{つた}ならば、その夕^{方に}に死^{んでも}よい。</p>	<p>禹^がい^なか^つた^らば、私^は魚^{にな}つ^てい^ただ^らう。</p> <p>人^民に衣^食が十^分に^ある^ように^させ^たら^ば、自^然と^盗み^はし^ない^よう^にな^るだ^らう。</p> <p>人^は学^ばな^けれ^ば、道^理は^わか^らな^い。</p> <p>優^{れた}主^君で^なけ^れば^仕え^ない[。]</p> <p>聖^人で^ない^かぎ^りは、免^れる^のは^難しい[。]</p>	<p>もし後^継ぎ^の子^が輔^佐する^に足^るよ^うな^らば、輔^佐せ^よ。</p> <p>仮^に富^貴の^身に^なつ^たと^して^も、(あなた^を)^忘れ^ない^だら^う。</p> <p>たと^え江^東の^父兄^{たち}が、^憐れ^んで^私を^王に^した^とし^ても、</p> <p>仮^に晋^が斉^を伐^つた^とし^ても、楚^は必ず^斉を^救う^であ^らう。</p> <p>もし^いま^急いで^降参^しな^いら^ば、わ^しは^父親^を煮^るぞ[。]</p> <p>もし^先手^を打^てば^その^とき^は人^を制^する^こと^がで^き、後^手に^回れ^ばそ^のと^きは^人に^制せ^られ^る。</p>	<p>もし「もし」と読む字には、ほかに「設・使・即・誠」などがある。</p> <p>「いやシクモ…トモ」という訓読は、「仮にもし…であつても」という意味。</p> <p>「たとヒ」と読む字には、ほかに「仮設・設令」などがある。</p>
<p>口語訳をしてみてもから判断する。</p>	<p>●「微」は反実仮想の意で、「もし…でなかったならば…」の意を表す。</p> <p>●使役形は、「実際は…ではないが、…であるようにさせる」ということから、仮定の意を表す。</p> <p>●「不…不…」 「非…不…」は否定詞が二つあるので、二重否定の場合と間違わないように注意する。ほかに「無…不…」(…がなければ…ない)がある。</p> <p>●民^無信^{、不}立[。](民に信^無くんば、立^たず。)</p>	<p>●「主語+雖…」の場合は確定条件(…であるけれども)になることが多い。その他の場合は仮定条件となる。</p> <p>●「今…」は、「今、仮に…するならば」ということで、仮定の意味になる。</p>	<p>●「主語+雖…」の場合は確定条件(…であるけれども)になることが多い。その他の場合は仮定条件となる。</p> <p>●「今…」は、「今、仮に…するならば」ということで、仮定の意味になる。</p>

(程度・分量を限定し、文を強調する。)

限定の助字	限定の副詞
<p>―耳・―已・―而已・―爾 (…だけだ)</p>	<p>但ノミ (ただ…だけだ) 唯ノミ 只ノミ 直ノミ 獨ノミ 纒ノミ (ただだけだ) (ただだけが…だ) (かろうじて…だけだ)</p>
<p>楚人沐猴而冠耳。 (楚人は沐猴にして冠するのみ。) 以為歡笑爾。 (以つて歡笑を為すのみ。)</p>	<p>但聞人語響。 (但だ人語の響くを聞くのみ。) 天下英雄唯君与我。 (天下の英雄は唯だ君と我とのみ。) 今獨臣有船。 (今獨り臣のみ船有り。) 初極狭、纒通人。 (初めは極めて狭く、纒かに人を通ずるのみ。)</p>
<p>楚の人間は猿が冠をかぶっているだけだ。 お笑いぐさとしただけだ。 ただ人の声が響いてくるだけだ。 天下の英雄はただあなたと私だけだ。 ただ私だけが船を持っている。 はじめのうちはとても狭く、かろうじて人を通すだけだ。</p>	<p>ほかに「已矣・也已・而已矣」などがある。 ● 限定の意味(…だけだ)を表す以外に、断定の意味(…だ)を表す場合もある。 ● 句末に限定の助字がなくても「のみ」を添えて読むのが普通。詩の場合は句調の関係から「のみ」を省略することがある。 ● 限定の副詞と助字を併せて用いる場合も多い。 ・直不百歩耳。(直だ百歩ならざるのみ) ● 他の限定の副詞に「惟・祇・徒」などがある。</p>

比較・選択形 (二つの事物の優劣を比較し、また、両者を比較して一方を選ぶ意を表す。)

選 択 形		比 較 形	
与を使う複合形	寧一否定詞	否定詞+助字	前置詞
<p>与^{よりハ}レ^ハ 孰^ハ若^ニ (〜よりは…の方がよい)</p> <p>与^{よりハ}レ^ハ 不^ズ如^シレ^ハ (〜よりは…の方がよい)</p> <p>与^{よりハ}レ^ハ 寧^ニ (〜よりは…の方がよい)</p>	<p>寧^ハ 不^ズ (いっそ…でも〜ない)</p> <p>寧^ハ 無^シ (いっそ…でも〜ない)</p>	<p>〔A〕ハ 不^ズ如^シレ^ハ 〔B〕ニ 〔A〕ハ 不^ズ若^シレ^ハ 〔B〕ニ (〔A〕は〔B〕に及ばない、〔A〕よりは〔B〕の方がよい)</p> <p>〔A〕ハ 莫^シ 焉^ニ (〔A〕より…なものはない)</p> <p>〔A〕ハ 無^シ 若^シ 〔B〕ハ 〔A〕ハ 一 番^ニ だ (〔A〕は…が一番だ。)</p>	<p>〔A〕ヨリモ 〔A〕ヨリモ 一 乎 〔A〕ヨリモ 一 于 〔B〕ニ</p> <p>霜^ハ葉^ハ紅^ニ於^テ 二 月 花^ハ (霜葉は二月の花よりも紅なり。)</p> <p>天^下ニ 莫^ク柔^ク弱^ク 于 水^ニ (天下に水よりも柔弱なるは莫し。)</p>
<p>礼^ハ与^リ其^ノ奢^{ラン}也、寧^ニ儉^{ナレ} (礼は其の奢らんよりは、寧ろ儉なれ。)</p> <p>与^リ其^ノ生^{キテ}而^モ無^シ義^ニ、固^シ不^ズ如^シ烹^ル (其の生きて義無からんよりは、固より烹らるるに如かず。)</p> <p>与^リ其^ノ有^リ譽^ル於^テ前^ニ、孰^ハ若^シ無^シ毀^ル於^テ其^ノ後^ニ (其の前に誉れ有らんよりは、其の後に毀り無きに孰若れぞ。)</p>	<p>寧^ニ 刑^ノ罰^ヲ所^ニ加^フ 不^ズ 為^ラ 陳^ノ君^ノ所^ニ短^ル (寧ろ刑罰の加はる所と為るとも、陳君の短る所と為らず。)</p> <p>寧^ニ 為^ル 鶏^ノ口^ト、無^シ 為^ル 牛^ノ後^ト (寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為る無かれ。)</p>	<p>晋^ノ国^ハ天^下ニ 莫^ク強^ク 焉^ニ (晋国は天下に焉より強きは莫し。)</p> <p>知^ル臣^ハ莫^ク如^シ君^ニ (臣を知るは君に如くは莫し。)</p> <p>衣^ハ莫^ク若^シ新^ニ (衣は新たなるに若くは莫し。)</p>	<p>霜^にうたれた葉は二月に咲く花よりも赤い。</p> <p>天下に水よりも柔弱なものはない。</p>
<p>礼というものは贅沢であるよりは、つつましやかな方がよい。</p> <p>生きていて義でないよりは、煮殺された方がよい。</p> <p>生前に誉れがあるよりは、死後に非難されない方がよい。</p>	<p>いっそ鶏の口になつても、牛の尻にはなるな。</p> <p>いっそ刑罰を加えられても、陳君に非難されてはならない。</p>	<p>百回聞くことは一回見るのに及ばない。</p> <p>臣下を知るのは君主が一番だ。</p> <p>衣服は新しいのが一番だ。</p> <p>天下で晋国より強いものはない。</p>	<p>● 比較を表す前置詞の上には、必ず形容詞・形容動詞が置かれる。送り仮名は「ヨリ」「ヨリモ」と付ける。</p>
<p>● 「孰若」と読むものには、ほかに「孰与・何如」などがある。</p>	<p>● 前者(〜)よりも後者(―)を選択する意を表す。</p> <p>● 「無」は、禁止(…するな)の意。</p>	<p>● 「〔A〕ハ 不^ズ如^シレ^ハ 〔B〕ニ」は、〔A〕と〔B〕を比較した場合、〔A〕よりも〔B〕の方がまさっていることを表し、「〔A〕ハ 無^シ如^シレ^ハ 〔B〕ニ」は、〔A〕が最もすぐれていること(比較の最上級)を表す。</p> <p>● 「〔A〕ハ 莫^シ 焉^ニ」も最上級を表す形式。</p>	

抑揚・累加形

(まず程度の低いことを述べておき、次に、述べようとすることを出して強調する。)

累加形		抑揚形			
反語+限定	否定詞+限定の副詞	以一而・且	且・尚・猶一安・何	且・尚・猶一況	況
<p>豈唯(一乎)・豈独(一乎) (どうしてただ…ただであるうか)</p>	<p>非不唯(一)・非不独(一) (ただ…ただでなく、)</p>	<p>以(一)且(一) (Aをもつてさえ…)</p>	<p>且(一)尚(一)猶(一) (Aでさえも…の、Bなぞを…しようか)</p>	<p>且(一)尚(一)猶(一) (Aでさえも…の、ましてBはなおさらだ)</p>	<p>況(一) (Aでさえ…の、ましてBはなおさらだ)</p>
<p>豈唯(一)順(一)之乎(一) (豈に唯だに之に順ふのみならんや。)</p>	<p>非徒(一)無益(一)而又(一)害(一)之(一) (徒だに益無きのみならず、益、而又害之。)</p>	<p>以(一)秦(一)王(一)之(一)威(一)而(一)我(一)廷(一)叱(一)之(一) (秦王の威を以つてして、而我は之を廷叱す。)</p>	<p>臣(一)死(一)且(一)不(一)避(一)卮(一)酒(一)安(一)足(一)辞(一)乎(一) (臣死すら且つ避けず、卮酒安んぞ辞するに足らんや。)</p>	<p>死(一)馬(一)且(一)買(一)之(一)況(一)生(一)者(一)乎(一) (死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや。)</p>	<p>天子(一)不(一)召(一)師(一)而(一)况(一)諸(一)侯(一)乎(一) (天子すら師を召さず、而るを況んや諸侯をや。)</p>
<p>どうしてただそれに順うだけであるうか。</p>	<p>ただ益がないだけでなく、かえって害を与える。</p>	<p>秦王の威力をもつてさえ、私は彼を朝廷で叱りつけた。 獣が食べ合うことでさえ、人は憎み嫌うものである。</p>	<p>私は死さずとも避けはしないのに、杯の酒などどうして辞退しようか。 現役の將軍でさえも夜の通行ができないのに、どうして退役將軍ができればようか。</p>	<p>死んだ馬でさえも買うのに、まして生きている場合はなおさらだ。 天地でさえも永遠でありえないのに、まして人間の場合はなおさらだ。</p>	<p>天子でさえも先生を呼びよせないのに、まして諸侯の場合はなおさらだ。 凡人でさえもそれを恥じるのに、まして將軍・大臣の場合はなおさらだ。</p>
<p>●反語の句法を用い、この後に「いや、それだけではない」という語気が加わる。</p>	<p>●「不唯(一)」の下には「而又(一)」の呼応することが多い。英語の「not only, but also」と類似している。「唯」は「ただ」と読む。「唯」のほかに「惟・徒・直」なども用いる。</p>	<p>●この後に「況(一)乎(一)」が省略されており、例文にはそれぞれ「况(一)廉頗乎(一)」「況(一)人相食(一)乎(一)」が続くと考えればよい。</p>	<p>●前項の「況(一)乎(一)」の部分を反語形に変えたもの。</p>	<p>●「且・尚・猶」を加えて、「Aが―である」とこの強調の度を増したものの「Aでさえも―」の「も」に当たる。</p>	<p>●「Aでさえ―であるのに、Bが―である」という表現で、「Bが―である」ことを強調する。「乎」は省略されることもあるが、必ず「(一)ヲヤ」と訓読する。</p>



感嘆形

(感動の気持ちを、そのまま表す。)

その他	感嘆の助字	感嘆詞
<p>〈疑問の形〉 〈反語の形〉 〈倒置法〉</p>	<p>— 哉^{かな} — 夫^{かな} — 矣^{かな} (…なあ) — 乎^か — 也^や</p>	<p>嗟^あ乎^あ — (ああ…なあ) 唉^あ — 嗟^あ — 噫^あ — 嗚呼^あ —</p>
<p>是^レ何^ノ楚^ソ人之^キ多^キ也[。] (是^レ何^ノ楚^ソ人之^キ多^キ也[。]) 豈^ニ不^レ誠^ニ大^ニ丈^ニ夫^ニ乎[。] (豈^ニ不^レ誠^ニ大^ニ丈^ニ夫^ニ乎[。]) 甚^ク哉[。]、吾^ハ衰^{フル}也[。] (甚^ク哉[。]、吾^ハ衰^{フル}也[。])</p>	<p>悲^シ哉[。] (悲^シ哉[。]) 逝^ク者^ハ如^ク斯^ク夫[。] (逝^ク者^ハ如^ク斯^ク夫[。])</p>	<p>嗚呼[。]、其^レ真^ニ無^キ馬^邪。(嗚呼[。]、其^レ真^ニ無^キ馬^邪。) 嗚呼[。]、其^レ真^ニ無^キ馬^邪。(嗚呼[。]、其^レ真^ニ無^キ馬^邪。)</p>
<p>これはなんと楚人の多いことだなあ。 なんと誠の男子たる者ではないか。 ひどいものだなあ、私の衰えも。</p>	<p>悲しいなあ。 ゆくものは、このようであるなあ。</p>	<p>ああ、小僧め、ともに謀るに足らな いやつよ。 ああ、本当に名馬はいないのか。</p>
<p>● 反語の形には、ほかに「不^レ亦^レ乎[。]」の形をとるものがある。 ● 「吾^ハ衰^{フル}也[。]甚^ク哉[。]」の倒置で、一種の強調構文。</p>	<p>● 感嘆詞と感嘆の助字をともに用いる場合も多い。 ● 嗚呼[。]、哀^シ哉[。] (嗚呼[。]、哀^シ哉[。])</p>	<p>● ほかに「吁[。]、於[。]、嗟[。]、夫[。]」などがあり、いずれも「ああ」と訓読する。「嗚」の字に注意する。</p>